

本を選ぶ

NO.448 2022年(令和4年)9月20日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

<http://www.las2005.com>

本社 〒114-0002 東京都北区王子 4-23-4 TEL=03-6908-4643

●<ろん・ぼわん>植物たちのおしゃべり 続

●選書の法則:S.R. ランガナタンからの187のメッセージ (21)

●●●●●ろん・ぼわん●●●●●

植物たちのおしゃべり 続

2021年11月、フランスでは動物愛護に関する法改正案が可決された。この法律の成立によってペットショップでの犬や猫の販売、水族館などでのイルカやシャチのショー、サーカスでの野生動物の使用、さらにミンクの養殖などが禁止される。日本では到底通りそうにない厳しい法改正だ。

そのフランスで本来は北極や亜北極の水域に生息する体長4メートルのシロイルカが8月2日にパリから約70キロのセヌ川で発見され、話題になった。手を尽くして海へ戻そうと試みたがうまくいかず、結局安楽死させられた。

もう一つも海の動物のニュース。ノルウェーの漁業庁はオスロの湾に7月から居着き、市民の人気を集めていたセイウチに安楽死の処置を施したと発表した。北欧神話の美と愛の女神にちなんで「フレイヤ」と名付けられたこのセイウチは、体重600キロの雌。欧州各国の海に出没し、オスロでは7月17日から目撃されていた。当局は市民に対し、フレイヤに近づかないよう呼び掛けてきたが、接近して写真を撮ろうとする人が後を絶たず、中には子ども連れて近づく人もいた。フレイヤが強いストレスにさらされていることから、当局は安楽死を検討していると明かしていた。(AFP通信のニュースより)

関連はないかもしれないが、近年の地球の異常気象は年々苛烈さを増し、この夏も各地で集中豪雨、早ばつなど、これまでの常識とはかけ離れた記録的な災害が起きている。イギリスでは中部や南西部で猛烈な熱波に襲われ山火事の頻発、さらにテムズ川の源泉がついに干上がったと報じられた。水不足も深刻さを増している。ヨーロッパ本土でもフランスやスペイン、ポルトガルでは考えられない高温と早ばつが発生している。これら名だたる農業国では穀物や野菜などの一次的農作物はおろか加工品原料である葡萄への影響は不可避である。もはや直面する農家ならずともワイン愛好家のため息が聞こえてくるようだ。植物は、信じがたいほどの強靱さをもってはいるが、一方で気象に左右されるのは免れない。

動物愛護があるのなら、植物についてはどうなのか。2008年末にスイス連邦議会の「ヒト以外の種の遺伝子工学に関する連邦倫理委員会」が植物の尊厳についての報告書を出したという話はあまり知られていない。ちなみに連邦倫理委員会は2008年イグノーベル賞の平和賞を受賞している。

その内容はたとえば「植物にも尊厳があり、みだりに花を摘むことは非倫理的行為である」というものだ。(やはりAFP通信のニュースより)理由として植物にも「知性」があるから、などとは言っていないものの、植物に寄り添って、と言うよりは人間中心の考え方の延長上にあると感じてしまう。植物を大切に扱うのは当然として、人は何でも擬人化してしまう傾向が強いようだ。権利・尊厳・知性、どれも人間界の概念ではないのか……。 (埜村 太郎)

選書の法則： S. R. ランガナタンからの187のメッセージ (21)

吉植 庄栄

2 1. 第四法則と選書・中

『図書館選書論第2版』の内容を、ランガナタンがよく使った架空の対談方式で紹介している。前回から第四法則について。時間を節約しないで3回登場の内の2回目。

【登場人物】

○ランガナタン：図書館界のビッグスター、S. R. ランガナタン (1892-1972) 先生。今年は生誕 130 周年・没後 50 周年。イベント企画してくれる方、超大大募集！！！全国どこにでも行きます！（筆者がですがね。）

○第四法則くん：ランガナタンの著作『図書館学の五法則』に出てくる「読者の時間を節約せよ (Save the time of the reader)」という4番目の法則。短気でせっかちで一本気。江戸っ子言葉をしゃべるぜ！

○その昔、参考図書って時間節約の道具だったんだぜ

ランガナタン (以下「ラ」)：さてお待ちせだった。またよろしく頼む。

第四法則くん (以下「四」)：師匠、この3か月長かったぜ。毎日とんでもなくあちーや、と持っている内に秋になっちまいやがった。

ラ：筆者さんの住む日本の東北地方のある高校が、我が国だとクリケットみたいなスポーツである野球の全国大会で優勝したようだな (注：仙台育英高校)。104回目にしてその東北地区からは初めてだったそうだ。

四：筆者さん、生きてる間に無いかも (注：筆者は2022年で50歳) と思っていたからすごく驚いたらしいぜ。

ラ：まあ長く生きてると色々あるな。ロシアはウクライナに攻め込むし、戦前以来あり得なかった総理大臣経験者が暗殺される大事件が、日本で86年ぶりに起きた。

四：最後まで想定外な人で開いた口が塞がらない、と筆者さん何だか哀しくなったらしいっすよ。

ラ：インド＝日本の国交強化に尽力したのに凶弾に倒れて、非常に残念だな。さて、今回はちょっと飛躍だが、本を探しやすくするコツの話だ。

四：師匠！この連載は、「選書」の話の連載ですぜ？

ラ：まあ聞き給え。その昔、まだインターネットも無ければ蔵書検索システム (以下OPAC) も無かった頃、図書館の本は何で探してた？

四：そいつああ、決まってまさ。カード目録でしょう？

ラ：その通り。それでな、それ以外に冊子の目録もあったのだよ。

四：そうそう、そいつ！でかくて分厚くてよ、そんでもってなかなか欲しい本を探すのに骨折れんだよなあ。

ラ：インターネットが無い時代は、結局紙に頼って本を探していたのだ。これを書誌・目録・記事索引などと言ったのだな。

四：それにしてもめんどくせー時代でしたね。ほんと今考えるとまどろっこしくて腐っちまう！

○探す時間を節約してくれる本を選ぼう

ラ：ということで、昔話ではあるが、本を探すための本である書誌・目録・記事索引の話をしよう。これらは利用者の本を探す時間を節約してくれる本である。選書業務では、このような本を優先的に選ぼう、という話だ。

四：やっと理由がわかりやしたぜ、師匠！

ラ：まあ今では全てオンライン検索システムに移行しているが、この話をするのも何かの役に立つだろう。

四：たしかに！するってえと、そもそもの話を教えてください。書誌と目録、記事索引って何が違うんですかい？

ラ：ではまず書誌の話をしよう。書誌とは、どのような文献があるかをリスト化した本のことだ。よく何かのテーマに基づいた書誌が作成されていた。

四：例えばどんなのですかい？

ラ：児童文学の作品書誌や、翻訳小説の書誌などが今も刊行されているな。

四：ではそいつらを見て、こいつを読みてー！ってなった時にはどうするんですかい？

ラ：図書館の蔵書目録 (冊子) で探すのだ。まさに今はOPACに継承されているが、特殊な資料、例

えば貴重資料やコレクションの中にはまだこの蔵書目録を探さないとならないものもある。

四：うわー、めんどくせーや。

ラ：そう言うでない。もうレアなケースだ。最近は、貴重書目録もオンライン化が進んでより便利になりつつある。

四：そいつはめでてえなあ。

○1冊の本

ラ：それでだ、人が本を探す時には1冊の本を探すケースと、本や雑誌の中味の記事・論文を探す場合がある。

四：なるほど。

ラ：では1冊の本を探す場合だ。昔は、著者かタイトルで探すことができるようにカード目録を整備したものだ。

四：1つの同じカードのてっぺんに、「著者」を見出しにつけたり、見出しごとに別々のカードボックスの島を置くあれですね。

ラ：そうだ。しかし本を探すと、そんな単純ではないだろう？本の主題、つまり「どんなことが書いてあるか」から探すことができないと利用者さんは、困るだろう。

四：もうちょっと分かり易くおねげーしますぜ。

ラ：例えばだ。ウェイン・A. ウィーガンド著；川崎良孝，村上加代子訳『手に負えない改革者：メルヴィル・デューイの生涯』という本がある。これを第四法則くんは何をキーワードに探す？

四：うーん、やっぱりM. デューイ師匠っすよね。十進分類法を発明した偉人すよ。すげー破天荒な人生だったらしいっすね。

ラ：そうだ、デューイ先生で探す。つまり主題だよな。カード目録や冊子目録で、著者のウィーガンドやタイトルの『手に負えない……』からは普通探さないよね？

四：大体、デューイ師匠のこと知りてーのに、著者やタイトルなんか全然眼中に無くて覚えてないっすよ！

ラ：だろう。そんなものだ。これは伝記と旅行関連の図書に顕著だな。例えばインド旅行のための

本を探したいのに、著者で探さないだろう。しかし、本の主題、これを専門用語で件名というが、これをカード目録のてっぺんに書いた主題目録コーナーの島を設置するのは、目録作業もスペースも大変だ。とはいえ、この主題で本を探すことは、利用者にとって自然なことなのだよ。であるので、図書館の仕事としては非常に大事なのである。

四：というのもあって、やっぱり簡単に主題検索できる OPAC って偉大なんですね。件名のデータが本のデータ1つ1つに入力されていて、それでもってばばばーと集めてきやすよね、師匠！

ラ：うむ、そうなのだ。

○本の中味や雑誌論文

ラ：それでだ、本を探すのも一苦労だが、今や本の各章の内容や雑誌論文を検索できないと、利用者にとって本当に関心と適合する資料を完全に探すことができない。第三法則くんの主張だが、究極的には全ての書かれたものは本1冊だろうが一部だろうが、読みたい人が見つけられるようにせねばならない。

四：第三法則兄貴だけじゃあなく、俺もばばっと見つけられるようにできれば、嬉しいっすねえ。

ラ：そうだろう。そんな訳でだ、記事索引の必要性を説明するぞ。さっきは本を探しやすくするように目録の必要性を説明したが、この記事索引で本の中味や雑誌論文自体を探すことができる。

四：そうなるってニッチな話題で書かれたものも、頑張れば見つけられるようになりますぜ。

ラ：うむ。中味の記事や論文まで探せると、本当にマニアックな分野まで主題で探せるぞ。そうすれば本や雑誌のタイトルでは分からなかった情報まで突き止めることができる訳だ。

四：そこまでできると、時間は大幅に短縮できるにちげーねー。

○CiNii Research っすげーや

ラ：それもこの仕組みがオンラインシステムになったお陰で、特に論文は非常に探しやすくなった。特に CiNii Research(図1：2022年3月まで

はCiNii Articles)のお陰で、どのような論文があるかを瞬時に検索することが可能となった。



図1 CiNii Research<<https://cir.nii.ac.jp/>>

四：いやほんと、こいつは楽すぎていけねえくらいすね。

ラ：でだ、冊子体時代の記事索引は、どこの図書館にその記事が掲載されている雑誌が所蔵されているかは何も書いていなかった。

四：ではどうしてたんですかい？

ラ：そこで蔵書目録の出番だ。特定できたその論文が所収されている雑誌を巻号まで調べる。そしてその巻号を所蔵する図書館を所蔵目録で特定して、それからどうするか考えるのだ。

四：へーーーーー！ふて一野郎だな！！

ラ：いやいや、当時はそれでも探せるだけ良かった。それ以前は、調べることすらできなかったのだ。

四：これでも大進歩なんすね！

ラ：そうだ！それで現在のオンラインシステムのお陰で「その論文が掲載されている雑誌を特定する。」→「その雑誌がどこの図書館にあるか調べる」→「行く or 複写物を取り寄せる」という迂遠なプロセスが、大幅に短縮されたのだ。現在この連載で紹介している1966年刊行の『図書館選書法』第2版での主張は、冊子体の雑誌記事索引を選書して利用者が文献を探しやすくしよう！というものだったのだが、今やそれは過去のものとなった。

○機関リポジトリも褒めまくるぜ！

四：そして、論文読むまでの時間も早くなりやしたよね、師匠！

ラ：そうだ。機関リポジトリというものが登場して、論文自体がインターネットで公開されるようになった。そのお陰で、このCiNii Researchを使うとPDFが公開されているものは、瞬時に読むこ

とができるようになった(図2)。



図2 CiNii Research 検索結果からの「機関リポジトリ」のリンク

四：その機関リポジトリってえのを、教えてください。

ラ：うむ。機関リポジトリとは、大学教員が発表した研究論文の大学ごとの公開サイトと思えば良い。大学内で刊行された研究雑誌、例えば紀要といった定期刊行物を中心に公開していることが多い。CiNii Researchの検索結果に「機関リポジトリ」というボタンがあればそれを押すとPDF版を閲覧し印刷できるぞ(図3)。

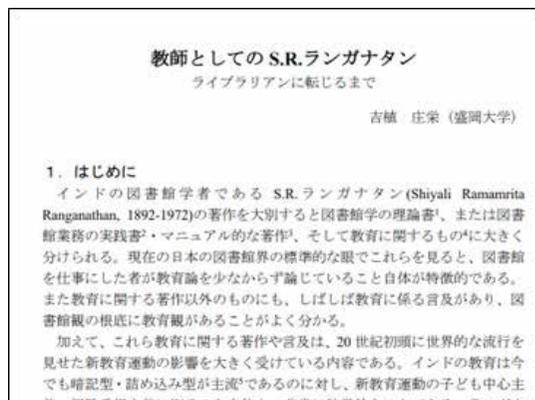


図3 機関リポジトリからDLした論文(例)

四：いやあ、本当に楽な時代になりやしたね。

ラ：うむ。本書では、利用者の「時間を節約する」ための資料を選書をすべきと書誌・目録・雑誌記事索引を推奨したものだ。具体的な推薦タイトルも列挙してな。しかし、現在はインターネットの時代になり、便利になった。文献を探して入手するのに本当に時間がかからなくなった。

○ランガナタン先生は、独立後のインドの発展に尽力したんだぜ

四：師匠にとってここ約 50 年間の図書館界の発展ってえのは、悲願達成ってえ感じすかい？

ラ：そうだそうだ。第二次世界大戦後の 1952 年、独立インドの科学発展のためにインド国立科学文献センター (INSDOC) の樹立に尽力したのだ。努力が実って、刊行されるあまたの科学論文が探しやすくなった。

四：2 度と植民地にならないよう、科学研究に力を入れて他国に負けないってね。図書館が国の独立と繁栄につとめたって寸法でさあね。

ラ：そうだ。戦後インドの発展を図書館や科学文献が支えたのだ。

四：誇りある仕事っすね、師匠！

ラ：うむ、そうだ。現在は国立コミュニケーション・政策研究所 (NIScPR) と名称を変えてその任に当たっている。

四：筆者さんも現地まで行ったってえ話じゃないすか。

ラ：日本語話せる先生が居て助かったらしい。本当に日本通な先生で、デスクに

「一期一会」の掛け軸が掲げられていて (図 4) 深く印象に残ったそうだ。



図 4 要人の日本語通訳をする図書館の先生のデスクの揮毫

四：まさかデリーで茶の湯の精神に出くわすとはねえ。

ラ：その先生が印・日の要人の通訳の仕事もやって亡くなった元総理に近侍する写真が多く残っているらしいな。

四：筆者さん、図書館員が国の要人の通訳することには、さらに一層たまげたらしいっす。帰国後ある日国営放送のニュース見てたら、この先生が画面に映ってて腰抜かしたんだってよ。それも、その後何度もね。まあ日本ではありえないっしょ。ラ：そうらしいな。日本での図書館員の地位から考えると、まず無い話らしい。

四：図書館員ってえーのはなあ、広い意味での教育や研究に携わる専門職なんでねー、日本研究をしている図書館員の先生が通訳したってインドではおかしくないんでさあ。

ラ：その通りだ。諸外国もそれが普通なのだがな。

四：日本は戦後、独特な発展を遂げて教育とか研究と縁遠い仕事として図書館員は扱われがちになっちゃったようですぜ。バーコードをピッ！って読んで、カウンターに立ってるだけで誰でも勤まるみたいだね。そんな訳でしまいには、根強く専門職と見なされている学校の先生と比べて格段に低い仕事に見られがちらしいっす。せちがれーなあ、って筆者さんは酒呑んで言ってやした。

ラ：厳しいねえ。酒も多くなる訳だ。

四：最近、寝てるか教えてるか (酒呑んで) 仕事しているか、らしいっす。つったって本人、毎日ちょー楽しいらしいっすよ。家族は元気だし弟子は増えて行くしってね。

ラ：それは結構。わしも 50 代は寝るか仕事するかだった。

四：師匠は、すごいワーカホリックぶりだったっすよね？ 飯食う時間も惜しんで朝しか食わないし、揚げ句の果てには奥さんにスプーンで口まで飯運んでもらって自分は書き物するって、このご時世じゃおいそれとできねーっすよ。

ラ：だって図書館の仕事楽しいんだもん♪

四：まあそれが一番でさあ。

ラ：さて、まとめよう。今回は選書の話から随分飛んでしまったが、他の図書館業務や情報検索に関わるので当時の文献探索ツールの説明から丁寧に話してみた。目録・書誌・記事索引らを選書で充実させ、それによって利用者の時間を節約するのだ。だが、今は OPAC 等のオンラインシステムに進化したので、インターネット公開の論文まで話を広げてみた訳だ。

四：はい、今回は歴史を含めて勉強になりやした。

ラ：次回はまた利用者の時間を節約するには、どんな選書をすべきかについて話を続けよう。

四：次回は待ち遠しいぜ、こんちきしょ！

(よしうえ しょうえい：盛岡大学文学部)